九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Lawrence and Frieda

Yoshimura Jiro
Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

https://doi.org/10.15017/1343509

出版情報：英語英文学論叢. 57, pp.15-41, 2007. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

ロレンスとフリーダ

吉　村　治　郎

1

1885 年 9 月 11 日、D.H.ロレンスはノッティンガムの炭坑町イーストウッドに生まれた。彼は五人兄弟の上から四番目であり、上には二人の兄と一人の姉がいた。下にはエイダという妹がいた。父のアーサーは炭坑夫で、新聞は何とか読めたが、自分の名前がようやく書けるだけの教養しかなかったという。一方、母のリディアはかなり知的な婦人だったようだ。アーサーとは違って教育もあり、また教師をした経験もあるので立派な標準英語を使ったという。知的世界への関心も強く、毎週、図書館に通って、本を何冊も借りて読んだといわれている。

父のアーサーは炭坑夫という職業からわかるとおり階級は労働者階級である。一方、母のリディアは造船技師の娘で、いわゆる中産階級の出身だった。もっとも、リディアの父親の職業に関しては実はリディアが子供たちに語って聞かせたもの以下だったことが、後に明らかになっている。事実上労働者階級であったらしい。しかし、というより、それだからこそリディアの育った家庭は一つ上の中産階級への憧れも人一倍強かったのだろう。そのため、リディアは中産階級的雰囲気の中で育てられたようである。標準語を使うことへのこだわりや、読書に打ち込む姿勢などは、リディアのそうした生い立ちを物語っている。こうした事情もあって、少なくとも、リディアの教養はアーサーとは比べ物にはならなかったのである。リディアの実家は一度も中産階級に属したことはないといわれているが、少なくとも精神的には中産階級といってよい。したがって、階級的にも教養的にも、さらには生きる姿勢も異なるリディアがどうしてアーサーと結婚したのか不思議であるが、リディアには、アーサーと結婚する前に交際していた男性との失恋の痛手があり、それが彼女に影響したようである。

しかし、階級も教養もかけ離れた二人の結婚は当然、うまくいく筈はなかった。アーサーは仕事を嫌がるタイプではなく、熱心だった。歌が好きで、陽気な性格をしていた。だが、酒好きで、その日暮らしの生活で満足する男であり、家庭の向上や子供の教育に意を払う男ではなかった。

一方、妻のリディアはアーサーとは正反対であった。彼女はいわば上昇志向を持った女性だった。家庭を経済的にも教養的にも少しでも良くしようと努める一方、子供の教育にも熱心だった。中産階級に特有の向上と堅実の精神を持ち合わせていたのである。彼女は自分の理想の家庭を実現するため、結婚当初、夫に禁酒の誓いを立てさせて協力を求めた。しかし、この誓いも長続きはしなかった。そういうわけで、生活観の違いから、二人の間には口論が絶えなかった。暴力に及んだことも一度ではなかったという。幼いロレンスは夜、父と母の言い争う声や、物が飛ぶ音をベッドの中で何度も聞いて辛く悲しい思いを味わっている。

また、ロレンス自身、階級差別の経験を持っている。それは少年時代のことである。親しくなった友達がある日、急に態度を変えてロレンスを避けるようになったという。ロレンスが炭坑夫の息子だと知ったからである。一億総中流意識を持つ日本人には容易に実感が湧かないが、これを見ても、イギリスにおける階級差別は厳しい現実であることがわかる。厳しい階級差別の現実を身をもって知っていたロレンスであった。したがって、こうした経験を持つロレンスはまさか後年、自分自身が父母同様、階級も育ちも全く異なる女性と結婚するなどとは夢想だにしなかったであろう。しかし、運命の悪戯か、彼は両親と同じような結婚をすることとなる。しかも、結婚相手の女性は階級と育ちが異なるだけではなかった。妻となった女性はイギリス人ではなくドイツ人であった。ロレンスは階級と育ちの違いに加えて人種の違いをも乗り越えなければないという試練を背負い込んだのである。いうまでもなく、ロレンスが選んだ結婚相手とは、大学時代の恩師の妻でフリーダという女性である。彼女はドイツの男爵の娘であった。二人の間には、当然、男と女の違いから来る衝突や葛藤があった。そして、これまた当然のことながら、階級の違いや、異なる出自と人種の相違から来る葛藤も避けることはできなかった。妻のフリーダが、「私たちの間には世の常の男と女の闘いがあった」(There was the ordinary man-and-woman fight between us) 1 と述べているとおりである。彼女は、また、次のように記している。

次に階級闘争があったのです。私たちは異なる世界の出身だったのです。私たちは共にそれぞれの階級を越えて個人としての人間の本質に、階級の相違よりもはるかに深い本質に生まれ変わらねばならなかったのです。

次に階級の相違以上に、人種の相違というものがあって、お互い歩み寄らねばならなかったのです。彼はイギリス人であり清教徒で、厳格で非妥協的、しかも高い意識を持ち、責任感も強かった。一方、私はドイツ人で、不分明でとりとめがなく、確固たるところがなかった。

Then there was the class war. We came from different worlds. We both had to reach beyond our class, to be reborn into the essence of our individual beings, the essence that is so much deeper than any class distinction.

Then beyond class there was the difference in race, to cross over to each other. He, the Englishman, Puritan, stern and uncompromising, so highly conscious and responsible; I, the German, with my vagueness and uncertainty, drifting along. (vii)

ロレンスは、中産階級出身の母に育てられているため、中産階級の価値観を持っているが、父が炭坑夫であったため、社会的には労働者階級の出身である。しかも、彼は何事に付けても常人以上に強烈な意識と自我をもった天才である。一方、妻となったフリーダは貴族の生まれである。しかもロレンスは彼女にとって外国人である。フリーダは、自分はロレンスと比べてのんびり屋だとしているが、こちらもロレンスに劣らない強烈な自我の持ち主である。二人が共に、強い自我を持っている点からも、また社会的にも、階級的にも、さらには精神的、人種的にも、かなりの相違があることから考えて、二人の生活は容易なものでなかったことは想像に難くない。しかし、このようにいくつも相違点があったにもかかわらず、二人は出会ってから、死別するまでの 18 年間を添い遂げたのである。では、ロレンスとその妻フリーダはこの相違をどのように乗り越え、どのようにして生活していったのであろうか。この小論では、フリーダの書いた『私ではなく、風が』(*Not I, But the Wind*) という手記を通して、この異色の取り合わせともいえるロレンスとフリーダがどのようにしてかかわりあい、お互いをどのように理解し、どのように折り合って結婚生活を送っ

たのかを明らかにしてみたい。

2

ロレンスは1912年4月の初め、旧師のアーネスト・ウィークリーを訪ね、そこで、その妻であったフリーダと出会う。恋に落ちた二人は早くも、同年5月3日にはチェアリング・クロス駅で落ち合う。そしてドーヴァー海峡を渡り、ドイツへ駆け落ちすることになる。ドイツではフリーダの生まれ故郷であるメッツに逗留する。ところが、ここでロレンスは面倒な事件に巻き込まれることになる。メッツのある要塞を二人で散歩していた時のことである。一人の歩哨が彼の肩をたたいた。その頃、イギリスとドイツが険悪な関係にあったため、ロレンスはイギリスの将校と勘違いされ、スパイ容疑で逮捕されたのである。幸い、その地の名士であったフリーダの父フリートリッヒ・フォン・リヒトホーフェン男爵のおかげでロレンスは釈放され、危機を脱することができた。フリーダによると、この後、ロレンスは彼女の家で父親と初めて会ったという。だが、父親はロレンスを歓迎する筈はなかった。彼は生粋の貴族である。一方、ロレンスは労働者階級出身である。ましてや、ロレンスが人妻であった娘フリーダを連れ出した駆け落ちの相手となればなおさらである。彼はロレンスを敵視し、二人は激しくにらみ合ったという。しかし、ロレンスがフリーダの父親と会うのはこれが最初で最後となった。フリーダの父は程なく亡くなるからである。

やがて、二人はドイツを転々とした後、同年8月5日、イタリアをめざして徒歩でアルプス越えを敢行する。これは実に6週間にも及ぶ大旅行であった。そして、翌年の3月30日までイタリアに滞在する。この後、1914年5月28日、懸案であったフリーダとウィークリーの離婚が成立した。そして、ロレンスは7月13日に、晴れて、イギリスでフリーダと正式に結婚を果たすことができた。ただし、フリーダは結婚などという形式的なものはどうでも良かったとも述べている。ロレンスの方は大変喜んだという。結婚して5年後の1919年、ロレンスはフリーダとともに再びイタリアへと出奔する。ロレンスはもっと早くイギリスを去りたかったようだが、運悪く、1914年に第一次世界大戦が勃発したのである。そして、イギリスはドイツと敵国となった。そのため、今度はフリーダがドイツ人であるという理由からロレンス夫妻はスパイの疑いをかけられ長期に渡って監

視されるという不愉快な数年を過ごさねばならなかった。ようやくイギリスを出ることができたのは大戦終了後の 1919 年のことである。

その後は、セイロン、オーストラリア、タヒチ、メキシコ、そしてアメリカなど世界各地をめまぐるしく放浪する。そして、イギリスを出奔してから 11 年後の 1930 年 3 月 2 日、療養のため滞在していた南フランスのヴァンスで持病であった肺結核のため亡くなる。享年 44 歳であった。フリーダがロレンスとの夫婦生活を描いた『私ではなく、風が』を出版したのは、このロレンスの死から 4 年たった 1934 年のことである。タイトルはロレンスの「見よ、われらはやり遂げた」という詩の中から引用したものである。内容はロレンスと出会った 1912 年から、1930 年ロレンスが亡くなるまでの約 18 年間の生活を時間の流れに従って記録したものとなっている。特徴的なことは、頻繁にロレンスの書簡が引用されており、これが量的には全体の約半分を占める形になっている。そのため、『私ではなく、風が』はフリーダ自身が書いたものであるにもかかわらず、事実上フリーダとロレンスの合作となっている。しかも、ここに引用されたロレンスの書簡はフリーダや、彼女の母、そして彼女の姉といった、ロレンスが信頼する身内に宛てたものである。ロレンスが、これらの人たち以外に宛てて書いた書簡は現在、ロレンス書簡集としていくつも出版されているが、『私ではなく、風が』に収められた書簡はそれらの書簡集には収められていない貴重な資料である。しかも、信頼する身内に宛てて書いたものであるだけに、他の人に宛てたものとは違って、ロレンスの生の声が表現されているように思われる。妻であるフリーダ宛のものはもちろんのこと、特に、フリーダの母であるアンナに宛てた書簡はそうである。ロレンスは 1910 年 12 月に実母を亡くしていた。そのため、フリーダの母親を実の母のように慕っていたようだ。この義母の誕生日にはきちんと贈り物をしたり、時には小遣いを送ったりしている。義母は夫亡き後、身分の高い夫人の入る養老院で暮らすとはいえ、男爵家に嫁いだ歴とした貴婦人である。おそらく気位も低くはなかったであろうが、娘フリーダの選んだ伴侶ということもあってか、ロレンスと敵対した亡夫とは違って、身分違いのロレンスにわが子同然に接したようである。分け隔てのない義母の態度に対し、ロレンスも心を開いたようだ。自分の悩みなど個人的な思いを率直にこの義母宛の書簡で打ち明けている。いずれにしても、父母がいがみ合う家庭の中で育ったロレンスにとって、暖かく自分を迎え入れてくれたフリーダ

一家との交際は多少とも心なごむものであったようだ。『私ではなく、風が』はこうしたロレンスの個人的生活を伝えてくれる貴重な手記である。

『私ではなく、風が』によるとフリーダがロレンスと出会ったのは1912年4月となっている。この時、フリーダは33歳の家庭婦人であった。しかも一男二女の母であった。夫はノッティンガム大学教授アーネスト・ウィークリーである。一方、ロレンスは26歳の青年であった。ロレンスはそのひと月前の3月に今まで勤めていたクロイドンのデイヴィッドソン・ロード・スクールでの教職を病気のため辞していた。4月に旧師ウィークリー教授宅を訪ねたのはドイツの大学講師の職を斡旋してもらうためであった。

初めてロレンスに会ったフリーダにとって、背が高く痩せた彼の姿、生き生きとしたまっすぐな足、身軽で落ち着いた挙動、そして気取りのなさが印象に残ったようだ。こうした特徴は、普通ならば取り立てて美点として注意を引く筈のないものであるが、フリーダは、却ってそれに心を惹かれたようである。しかし、彼女はロレンスのこのような様子の中に確実に普通の人にはない違った何かを感じ取っていたのである。フリーダは次のように述べている。

> 彼が家に来た時の姿が目に浮かびます。背が高く痩せた姿、生き生きとしたまっすぐな足、身軽で落ち着いた態度。気取りのない生地そのままの人に見えました。しかし、私は注意を引かれたのです。目に見える以上のものがあったからです。
>
> I see him before me as he entered the house. A long thin figure, quick straight legs, light, sure movements. He seemed so obviously simple. Yet he arrested my attention. There was something more than met the eye.(4)

写真を見る限り、ロレンスは決して人受けする美男子ではない。生来病弱でもあったし、栄養不足のせいで痩せこけていた。特に、フリーダと会った時は、ロレンスは教職を辞する原因となった肺炎を患った直後である。普段以上に青白く痩せ細っていたことだろう。しかし、外面はみすぼらしかったかも知れないが、天才としてのロレンスのただならぬ気質は見る人には見えたのであろう。それともフリーダにとって、これが結果的に

所謂運命の出会いになったので、後から振り返ると何かしら自分の一生を左右する意味深い出会いに見えたのであろうか。人はそうやって、運命の出会いを確認するところもあるからだ。しかし、少なくともフリーダにとってロレンスは今まで出合ったことのない特殊な、しかし、それだけに妙に心を引かずにはおかない人物であったことは間違いないであろう。そして、ロレンスのことをそのように感じるのは間違っていないと思われる。

この日、ロレンスとフリーダは、初対面にもかかわらず、ずいぶん話が弾み意気投合したようである。一方、ロレンス自身もフリーダに心引かれていた。彼にとってもこの出会いは運命の出会いだった。しばらくしてから、フリーダの許にロレンスから一通の手紙が届く。それには、「あなたはイギリス中で一番素晴らしい女性だ」("You are the most wonderful woman in all England.")(4)と書いてあったという。事実上の愛の告白である。もちろん、7歳年下のロレンスからそのような賛辞を与えられたからといって直ぐに熱くなるフリーダではなかった。フリーダは返事を出して「あなたはイギリスのご婦人方をそんなにたくさんご存知ではないでしょう。どうしてそんなことがわかるのですか」("You don't know many women in England, how do you know?")(4)と書き送ったという。おそらく、このようにフリーダがある程度抵抗感のある女性であったことがロレンスには魅力的だったのだろう。ロレンスは、権利意識の強い女性も好きではなかったが、言いなりになる女性も好まなかった。フリーダと出会う前、クロイドンで教職に就いていた時、ある女性と交際し婚約まで取り交わしていたという事実がある。結局この婚約は結婚までにはいたらなかったが、この教職時代、いわゆるフェミニズム運動に共鳴する女性たちと係わり合い、あまり良い印象を持っていなかった。というより、権利意識を振りかざす女性に対して嫌悪感さえ抱いていたようだ。事実、フリーダと初めて会ったその日、初対面であるにもかかわらず、フリーダの前でずけずけと女性たちをこき下ろしたという。こき下ろされた女性たちとは、おそらく教師として働いていたクロイドン時代に出会ったフェミニストたちであろう。『恋する女たち』という小説に登場するハーマイオニは、おそらくこの時代に出会った女性が一部モデルになったものと思われる。

フリーダはどちらかというと権利意識を振りかざす女性ではないようである。実際、彼女は職を持った働く女性ではなかった。大学教授の妻として、三人の子供にも恵まれ、経済的にも恵まれた生活を送っていた。も

ともと貴族の生まれであり、目指すべきものは特になかった筈である。事実、フリーダは次のように告白している。

> 私は31歳で三人の子供がありました。結婚生活はうまくいっているようでした。女として当然望みうることはすべてかなえられていました。
> I was thirty-one and had three children. My marriage seemed a success. I had all a woman can reasonably ask.(3)

この言葉の後、フリーダはロレンスに言われた言葉を引用して、その当時の自分のことを「スモックのほつれかかった」("smock ravelled")(3)女性だったとしているが、これはロレンスから指摘されて始めて気づいたのであり、それ以前はおそらく先に引用したように経済的にも精神的にも比較的安定した生活を送り、特に不満は意識していなかったようだ。しかし、フリーダは所謂女性としての権利を声高に主張するフェミニストではないが、女性としての自我の強さは、おそらくロレンスに勝るとも劣らないであろう。

3

フリーダは、ロレンスが現れる前までは何不自由ない生活を送っていた。彼女自身が言っているように、「女として当然望みうることはすべてかなえられていた」のである。不満も特になかったと思われる。しかし、ロレンスと出会ってからフリーダは大きく変わる。というより、本来のフリーダを取り戻すといったほうが適切であろう。

彼女は三人の子供の母親であったことは先に述べた。母親と子供の絆は肉体的かつ感情的なものであり、おそらく父親と子供の精神的絆よりもはるかに強いものである。しかし、フリーダは悩んだ末、最終的には子供よりもロレンスの方を選んだ。フリーダはどうして子供との強い絆を断ち切ってまでロレンスを選んだのか。母性愛より強くフリーダの心を動かしたのは何であったのであろうか。この点は非常に興味深い問題である。『私ではなく、風が』を読むと、フリーダがロレンスに引かれたのは、よく世間で見られる一時的な熱病ではなかったことがわかる。フリーダとロレンスの二人の根本的な性格に深く根ざしているように見える。つまり、フリーダはロレンスと出会って彼女自身の本質に目覚めたのである。ではそれ

はどのような性質のものであろうか。それはフリーダの生い立ちに問題を解く鍵がありそうである。

フリーダは1879年、ドイツのリヒトホーフェン男爵家の三人娘の二女として生まれた。一家は夏になると毎年バーデン＝ビュルテンブルク州にあるシュバルツバルトに出かけるのが恒例だった。そこは有名な森林地帯である。そして、1898年7月、母親のアンナは娘たちを伴ってフロイブルクという町に滞在していた。この時フリーダはまだうら若き19歳である。そして、ちょうどこの時、フリーダの最初の夫となる英国の言語学者アーネスト・ウィークリーもここに来ていたのである。彼はフリーダの美貌と生まれながらの聡明さにすっかり心を奪われ、結婚を申し込んだと伝えられている。フリーダはこの申し込みを受け入れ、翌年の1899年8月29日、彼と結婚する。結婚後はドイツを去って、夫アーネストの勤務地であるイギリスのノッティンガムに移り住んだ。フリーダはこうして、ごく普通の結婚をし、物心両面で安定した生活を送っていたのである。しかし、もともと人並みな家庭婦人では納まりきれないものがフリーダにはあったようである。普通の枠をはみ出す傾向は幼少より、その片鱗があった。たとえば、フリーダが少女時代に引き起こした事件の一つにそれが如実に現れている。フリーダによると、ある日、連隊が隊列を組んで町を行進していくことがあったという。そんな時、フリーダは妹のヨハンナと庭の石塀に腰掛けていた。しかし、ただ行進を行儀よく見物していたのではなかった。二人は頃合を見計らって、その隊列の中に林檎や梨を投げ入れたのである。兵隊たちは隊列を乱し、連隊は大混乱におちいった。怒った指揮官の少佐が真っ赤な顔をして兵隊たちを怒鳴り散らすが、その時にはフリーダ姉妹は塀の内側に飛び降りて姿を消していた。そしてまた、塀の上に現れては同じ悪戯を繰り返したという。少年ならばやりそうな悪戯であるが、少年であっても、このような悪戯は大人の兵隊相手では相当肝っ玉がすわっていなければできないであろう。ましてやフリーダは幼い女の子である。かなり度胸のすわったおてんば娘であっただろうと思われる。

また、彼女は女の子と遊ぶより男の子や大人と遊ぶほうが好きだったらしい。普通の女の子であれば娯楽や社交を好むのだが、フリーダは違っていた。彼女は男の子たちと一緒にメッツ周辺の要塞に出かけていって、兵士たちの作った小屋や塹壕の間で遊びまわったのである。この頃から彼女は冒険好きで、ありきたりの遊びでは満足しないところがあったようだ。

このためフリーダは自分とは違う同年代の女の子を怖がったという。もちろん他の少女たちのほうがもっと男勝りのフリーダを恐れたか知れない。彼女は少女時代を次のように回想している。

> 私が何よりも好きだったのは、男の子たちと一緒にメッツ周辺の要塞に行って、兵士たちの作った小屋や塹壕の間で遊ぶことだった。私はいつも男の子や大人たちといるのが好きで、私の望む楽しみを与えてくれるのは彼らだけでした。私は女の人たちや、女の子たちが怖かった。私の少女時代、青年時代は私を戸惑わせたのです。私は娯楽とか社交的なものに満足できなかったのです。私はそれ以上のものを望んでいた。私は多くのものを望んだのです。
>
> What I loved most of all was playing with my boy friends in the fortifications around Metz, among the huts and trenches the soldiers had built. I always liked being with boys and men. Only they gave me the kind of interest I wanted. Women and girls frightened men. My adolescence and youth puzzled me. Pleasure and social stuff left me unsatisfied. There was something more I wanted, I wanted so much. (38)

こうした告白を見ても、彼女が生まれながらに冒険好きで、奔放不羈の性格を持っていたことが十分推察される。またこのような人柄であったため、少女時代、いわゆる普通の行儀の良い女の子になることも、女の子特有の遊びをすることにも違和感を感じていたのだろう。そして、そうした違和感をもっとも強く感じる時、それが普通の女性や、普通の女の子に対する恐怖心となって彼女を悩ませたのであろう。しかし、このような不羈の精神は 19 歳で最初の結婚をし、平穏な家庭の夫人となり、三人の子供の母となるという、女性ならば普通に辿る人生行路の中で抑圧されていたのである。しかし、フリーダは性格的に人並みな家庭婦人に納まる器ではなかった。ロレンスは彼女のそうした本来の性格を鋭く見抜いていたようである。そしてロレンスは彼女の中で眠っている彼女本来の本質を揺り起こし目覚めさせたといえる。彼は二度目に会った時、フリーダにずけずけと、「あなたは少しもご主人のことを意識してもいないし、まったく意にもかけていないではありませんか」("You are quite unaware of your husband,

you take no notice of him.")(4)といっている。彼女は、ロレンスにそのように指摘されて嫌だったと告白しているが、おそらく彼女の心理を言い当てていたと考えられる。妻であるフリーダのことを信じきっていた夫アーネストには気の毒な話であるが、普通の枠に収まりきれないフリーダの性格から考えて、平穏な結婚生活は彼女には似つかわしいものではなかったのである。フリーダはもちろんそれをはっきり意識していたわけではなかったようだ。しかし、上に引用したロレンスの言葉は、「スモックがほつれかかっている」と指摘した言葉とともにフリーダの結婚生活の本質的違和感を彼女に意識させるものであった。そして同時に眠っていたフリーダ本来の本質を目覚めさせるものであったようだ。それは、少なくともフリーダにとって真の自己の解放を意味した。流浪の民のようにロレンスとともに 18 年間世界をさまよう生活を過ごしたフリーダは次のようにいっている。

> 彼の愛は私の恥じらいと抑制とのすべてを一掃させ私の過去の失敗と不幸との数々を拭い去ってくれました。彼のために私は新しく、みずみずしくなって、小鳥のようにのびのびと軽やかに生きることができるようになりました。彼は私という人間の解放のために戦ってくれ、かつ、勝ったのでした。
>
> His love wiped out all my shames and inhibitions, the failures and the miseries of my past. He made me new and fresh, that I might live freely and lightly as a bird. He fought for the liberty of my being, and won. (viii)

フリーダは、ロレンスと出会うことによって、少女時代に兵士の隊列の中に林檎を投げ込んだ時の生き生きとした不羈の自分を取り戻したのである。

一方、ロレンス自身も性格的にありきたりの世界に満足できる人間ではなかった。そうした傾向は彼の文学の特徴によく現れている。ロレンス文学はよく脱構築の文学とみなされる。それは彼の文学が、キリスト教や、その他の既成概念を解体し新たな理想を構築することを使命とする文学であるからである。彼はキリスト教と理知への信頼を基礎にして構築されたヨーロッパ文明に真っ向から反旗を翻した大反逆児ともいえるであろ

う。1919 年にフリーダとともにイギリスを出奔し、その後、亡くなるまででも 11 年間という長い歳月に渡って世界を放浪するが、その放浪への旅へと向かわせたのはヨーロッパ近代文明に対する強い不信感であった。地理的にも、思想的にも未知の世界に踏み込むこうした生き様は、冒険者としてのロレンスの資質を物語るものである。ロレンスとフリーダは、階級的にも、人種的にも、乗り越えねばならないさまざまな相違を抱えていたが、共に不羈の精神と新しい天地を求める熱い思いを持っているところが共通していたのである。そして、この点こそ二人を強く結びつける最大かつ強烈な原動力となったといえるであろう。フリーダはロレンスとの 18 年間を振り返って次のように述べている。

> 私は女にとって最大の喜びと満足は、前進して闘っていく創造的な男性と暮らすことではないかと思います。そういうことが私はわかった。
>
> I think the greatest pleasure and satisfaction for a woman is to live with a creative man, when he goes ahead and fights—I found it so. (194)

もちろん、ここに述べられたフリーダの感懐はロレンスと 18 年過ごした後に生まれたものであって、ロレンスと出会った当初の意識ではない。しかし、フリーダは、創造的な男性としてのロレンスの本質を当初からある程度直感していたことは間違いないであろう。

4

放浪といえば、なんとなくロマンティックな詩情が伴うが、それは放浪というものを外部から見る傍観者の抱く感傷的感情といってよい。放浪をしている当事者にすればまた感じ方は異なるであろう。実際、人間は中国の仙人のように霞を食べて生きていくことはできない。まず食べていくことが最大の懸案となる。フリーダとロレンスが共に過ごした 18 年間は、互いの相違を乗り越え、お互い人間として新しく生まれ変わるための闘争であったが、同時に、いかにして食べていくかという生活上の大問題とも闘わねばならない 18 年間でもあった。しかし、放浪中は教職などの定職に就くことはできない。作家であるロレンスは当然、印税を頼りとするほ

かなかった。フリーダと駆け落ちした時、幸いにもロレンスは幾つか小説を出版していた。一年前の 1911 年 1 月に最初の長編小説『白孔雀』を出版していた。そして 1912 年 5 月、すなわちフリーダと出会う約 1 ヶ月後は『侵入者』を出していた。また駆け落ち後の 1913 年 5 月には、ロレンスの名作となった第三の長編小説『息子と恋人』を出版している。しかし、少しは世に認められた小説家とはいえ、まだ弱冠 26、7 歳の駆け出しであった。詳細は不明だが、印税といってもおそらく微々たるものであっただろう。事実、正式な結婚をする前の 1912 年に手に手をとってドイツに駆け落ちした時の生活は貧しいものだった。二人は暫くイザール河流域の、ある農家の屋根裏部屋で暮らしたことがあった。生活費は 1 週間に 15 シリングほどという貧しい生活である。ようやくロレンスの好きな黒パンと卵を買うことができるだけだった。不足気味な食料を補うため、オオバコの実や、イチゴ、ラズベリ、さらにはコケモモなどを食べたという。かつて大学入学資格試験に合格はしたものの学費がないために入学を一年延期したこともあるロレンスにとってこの貧しい生活はおそらくそれほど苦にはならなかっただろうと思われるが、貧乏に慣れているロレンスさえも生活上の不如意から不機嫌になったり、フリーダに手を上げることもあったようだ。このような時、フリーダの方も思い切り殴り返したと、手記は伝えている。しかも、ロレンスはこの後、相次いで作品を発表して多少は印税も増えるとはいえ、少なくともこの時点ではそのような見通しが全く立っていない時期である。したがってフリーダにとってこの貧しい生活は大変衝撃的なものだったであろう。というのも、彼女は幼いころから貴族の娘として何不自由のない生活を送っているからである。最初の結婚をした時も夫は大学教授であったし、女中つきだった。おそらく物心両面で生活上の不自由はなかった。したがって、ロレンスとの生活はそれまでの生活を一変させるものであったことだろう。フリーダとロレンスが正式に結婚した 1914 年以後も生活は大差がなかったようだ。熱い恋愛も生活苦の前ではしばしば手もなく崩壊するのが常であるが、二人は踏みとどまった。ロレンスはさておいて、夫と子供を置き去りにして駆け落ちしているフリーダは後には引きようがないという事情もあるが、こうした生活に十分耐えることができたのは、まず第一に、フリーダの天成の資質が大きく貢献しているように見える。それは彼女の楽天性といってよいであろうか。それとも恵まれた育ちから来る余裕といえるであろうか。フリーダはロレ

ンスとの貧乏生活を少しも苦にしているところは見当たらないのである。むしろ新鮮な経験として楽しんでいる風にも見える。たとえば、次のようなエピソードが記されている。

貴族出身のフリーダは、おそらく、召使に何でもやってもらっていたのだろう。そのため、庶民の女性とは違って料理はもちろん、家の掃除や片付けなど、いわゆる主婦業はまったく経験がなかった。事実、彼女はガスの付け方も知らなかった。最初にロレンスと出会った時、ロレンスに、こんなことも知らないのですかと怒鳴られている。したがって、主婦業は駆け落ち後始めて経験することになるのだが、フリーダはとくに整理整頓がまったく苦手でできなかったらしい。一方ロレンスは貧しい労働者階級出身なので、ほとんどすべて自分でやらなければならない環境に置かれていた。彼は椅子やテーブルまで作るという大工仕事もできれば、衣服の整理整頓もきちんとできた。おそらくそんなものは朝飯前だったであろう。したがって、何もできないフリーダは生活のこまごました仕事はロレンスにやってもらうか、さもなければ教わられねばならなかった。ある時、ロレンスはフリーダに整理整頓の習慣をつけようと考えた。そこで、毛織物はこの引き出し、絹織物はここ、木綿類はここに入れておくんだと、教えたことがあった。衣類の整頓は庶民の生活感覚からいえば、まったく平凡な日常の些事にすぎない。しかし、フリーダにとっては新鮮な経験であった。下界に降り立った高貴のお姫様のごとく目にするもの、手にふれるものすべてが好奇の的になったのかもしれない。彼女は衣類の仕分けそのものが珍しかったらしく、「大変面白そうに思われたので、いわれた通りにしました」 (it sounded amusing, so I did it.) (39)と楽しそうに述べている。しかし、いくら珍しいからとはいえ、いつまでもそれが続くわけではないが、フリーダのこうした受け止め方は一時的なものではなかったようである。既成の枠を嫌い、絶えず新しい経験を求め、その経験のなかで生きがいを感じるというフリーダの生き方は彼女の天成のなせる業だったようだ。そのために、ロレンスとの不安定な生活も、貧乏もさしたる苦にならなかった。却ってそれはロレンスと一緒にいればこそ味わうことのできるまれな経験として楽しんでいるように見える。こうした楽天性は恵まれた境遇に育った者の特徴ともいえるが、フリーダ自身の天成であったともいえるであろう。ロレンスとの生活を続けることができたのも、苦労さえも楽しい経験に変えてしまう、こうしたフリーダの楽天的だが、しかし、し

たたかな生命力に依存していたと思われる。

フリーダの人柄の大きさを証明するものはそれだけではない。ロレンスとの生活を可能にしたもう一つの原動力があった、それは既成のものにとらわれない彼女の自由な精神性である。

何度も繰り返すが、彼女は歴とした貴族の娘である。ところが、彼女は自分が貴族であることに固執することがないのである。そもそも、貴族の暮らしや身分に固執するならば大学教授夫人としての平穏で豊かな暮らしと子宝まで放棄してロレンスと一緒になったりはしなかったであろうけれども。フリーダは次のように記している。

> 彼[ロレンス]の目に私の美点の一つと映っていたものは、私がお金持ちになることにも、社交婦人的な地位を得ることにも少しも熱心でなかったことかと思います。私にしてみれば、こんなことは取り柄でもなんでもなく、貧乏は結構楽しんでいましたし、社交婦人になる気などまったくなかったのです。
>
> I think one of my merits in his eyes was my never being eager to be rich or to play a role in the social world. It was hardly merit on my part, I enjoyed being poor and I didn't want to play a role in the world. (71)

彼女のこうした言説は皮肉な目で見れば、自らの無思慮な失踪に対する、負けず嫌いの言い訳とも、居直りとも解釈できるであろう。しかし、そうした見方は、彼女には通用しないであろう。彼女の言説は何の衒いも気取りもない、心底からの率直な思いを吐露したものであるからだ。彼女は、さしたる努力をすることもなく、また少しの苦痛を感じることもなく、貴族の娘という社会的地位と意識を脱ぎ去ることができ、生まれたままの一人の人間になることができたようである。

しかし、意識とは別に、育ちというものは容易に変えようがない時もあったようだ。これはロレンスとて同じことであるが、それは二人がイザール河近くの農家の屋根裏部屋で暮らしていた時のことである。ある日、フリーダはロレンスとともにイザール河に泳ぎに行った。ところが、でこぼこ道を歩いたため靴の一方の踵が取れてしまった。フリーダはさっと靴を脱いでイザール河に思いっきりよく放り投げてしまった。しかも両方を投

げ捨てたのである。靴は片方のみあっても役に立たないものとはいえ、あまりにも気前よく靴を放り投げるので、ロレンスはあきれてしまった。フリーダは彼のあきれた顔を見て、靴を捨てれば裸足で帰らなければならないからだ、と解釈した。それでも、フリーダは、帰り道は人通りも少ないところだから、裸足でも平気だと思ったそうである。ところが、フリーダはロレンスから意外な言葉を聞くことになったのである。彼は次のように諭したという。

> 「一足の靴を作るにはずいぶん時間がかかるのだ。靴を作った人の苦労も尊重しなくっちゃいけないよ。」
> "A pair of shoes takes a long time to make and you should respect the labour somebody's put into those shoes."(39)

いかにも、労働者階級出身のロレンスらしい言葉である。ロレンスはあまり裕福ではない家庭で育ったため、節約と、物を大切にする習慣があったのだろうし、二人の生活は余裕のあるものではなかった。浪費を慎み、節約の心がけは、生活上絶対必要であった筈である。しかし、そのような中でもフリーダはかつての裕福な生活の癖が抜けなかったのであろう。フリーダは、諭す彼に次のように反論している。

> 「物は私のためにあるのよ、私が物のためにあるのではないの。だから、いやになったら捨ててしまうのよ。」
> "Things are there for me and not I for them, so when they are nuisance I throw them away."(39)

この反論はフリーダの裕福な育ちを示している。また、裸足で歩いて帰っても平気でいられる点は彼女の屈託のないおおらかさをも物語っている。育ちの著しく異なるこの二人の生活信条は互いに相手の行き過ぎをけん制し合うこともあったかも知れない。ロレンスの勤勉と倹約精神はフリーダに生活上の規律を与え、フリーダのおおらかな貴族的精神はロレンス的倹約生活が無味乾燥に陥る危険から救うこともあったであろう。もちろんうまくいくことのほうが少なく、たいていは衝突の火種になることの方が多かったと思われる。しかし、忘れてならない点は、二人が自分の思うこ

とを包み隠さず率直に相手にぶつけることである。彼は、これに限らず、夫婦間の意見や感情の食い違いが生じたときは、徹底して、しかも遠慮会釈なく、自分を相手にぶつけた。ロレンスはそれを意識的に用いたのである。このような時、普通のキリスト教徒ならば、大目にみて赦したり、譲歩をしたりして寛容な態度を取ることだろう。しかし、ロレンスには、キリスト教の説く愛の教えに対する反省と批判があった。

キリスト教では、汝の敵を愛せよ、左の頬をうたれたら、右の頬を差し出せ、と教えることで人間同士の融和と和合を実現するため隣人愛を説く。しかし、ロレンスは寛容と赦しを基本とするキリスト教の説くそのような愛の教えを敢えて拒絶した。その教えはキリストや仏陀など高度な精神性をそなえた人、すなわち精神的貴族にして始めて実践可能であると考えたからである。2反対にいえば、それは常人には高貴すぎる教えなのである。したがって、真の寛容と赦しの精神を持つことが難しい一般の常人がキリスト教の愛の教えを実践しようとしても、それは所詮、形式的な愛のままごとか、愛情ごっこに終わるおそれがある。最悪の場合、愛の名の下に己の意志を相手に強要したり、相手を支配する手段となることさえある。人間を愛し合わせる筈のキリスト教の愛の教えは、却って憎み合わせる結果を招く恐れさえあるのである。キリスト教の説く高貴な愛の教えと、その現実との乖離のなかで喘ぐ現代人の不幸をつぶさに観察し、そして自らも体験したロレンスは別の愛の方法を模索した。それは、相手に怒りを感じたのならば、聖人ぶってそれを抑制するのではなく、決着のつくまでお互い徹底的にぶつけることだった。もちろん、このような方法は口論だけですまないこともしばしばだった。時には、手も出たようである。しかし、ロレンスが一方的に手を出したのではない。フリーダも負けていなかった。時にはフリーダのほうが先にひっぱたいたこともあったようである。そのやり方のほうが、開放的で不羈の性格を持つ彼女に合っていたようだ。また、体力的にも負けていなかった。それどころか、病弱なロレンスを上回っていたようである。しかし、こうした徹底的決戦の後で二人は深い安息に到達したという。フリーダの次の言葉はそれを物語っている。

> あの人が怒りに任せて私に殴りかかったとしても、それがどうだというのでしょう。——私の方がおこらせたことだってあるし、たいていは周囲の生活に追い詰められて堪忍袋の緒を切らしたことが多い

のですから。私はあまり深く気にかけませんでした。殴り返すこともあれば、嵐の静まるのをじっと待つこともありました。私たちはすぐその場でとことん決戦するのでした。その後には安息が、本当の安息が来たのです。

私はこんなやり方の方が好きでした。闘わなければならなかったのです。もし彼がふてくされて、いつまでも私にうらみを抱くようだったら、どんなにかつまらない思いをしたことでしょう。

What does it amount to that he hit out at me in a rage, when I exasperated him, or mostly when the life around him drove him to the end of his patience? I didn't care very much. I hit back or waited till the storm in him subsided. We fought our battle outrght to the bitter end. Then there was peace, such peace.

I preferred it that way. Battles must be. If he had sulked or borne me a grudge, how tedious! (34)

実際、次のような実話がロレンスの身近にいた人によって伝えられている。

1922 年、アメリカの資産家メイベルの招きよってロレンスとフリーダがニューメキシコ州のタオスに行った時のことである。到着早々、人前も憚らず二人は派手な口論を始めたのである。ロレンスはタバコを吸うフリーダを咎めて、そのいやらしいタバコを口から取れ、その出っ張ったお腹をつきだすのをやめるんだ、と叫んだという。フリーダは中年太りしたお腹を突き出してタバコを吸っていたのであろう。それが、たまたま癇癪もちのロレンスの神経に触ったのである。それに対してフリーダは、そんな言い方はやめたほうがいいわよ、それができないというなら、私もあんたのことを言わせてもらうわ、とやり返したという。そばにいた人たちは、これでロレンスとフリーダの関係もおしまいだと確信したそうである。ところが、その期待は見事に裏切られてしまう。しかも喧嘩の数分後にである。彼らは、先ほどあれほど罵り合った二人が、信じられないことに、月の光の中を腕を組み二人だけの静かな世界に浸りながら歩いている姿を目撃したからである。彼らはこれにはあっけにとられてしまった。歯に衣着せぬ喧嘩にも驚いたが、それ以上に意外な結末にはもっと驚いたという。ロレンスはこうした形の男女の折り合いを自らの作品の中でも描いている。1920 年に出版された『恋する女たち』の中に登場するバーキンとそ

の恋人アーシュラの二人がそれである。二人はまさにロレンスとフリーダその人といえるであろう。

徹底的に決戦をして妥協点を探るというこのやり方は取り返しのつかない破局を招く危険があるばかりか、決死の覚悟が必要な、まさに難行といえる。そうした危険と苦行をも顧みず、ロレンスとフリーダは文字通り全身全霊をかけて激しくぶつかりあったのである。二人が強烈な自我と不羈の精神の持ち主だったことを考えれば、このような生き方は必然的であったともいえるかも知れない。しかし、破局に至ることがなかったのは、その根底に、階級の違い、種族の違い、といった困難な障害を乗り越えて新しい生活を生み出していこうとする共通の願いと不動の覚悟があったからである。二人の前途には、階級と人種の相違という困難な障害が立ちはだかっていることをはっきり認めたうえで、フリーダは次のように記している。

> ただ一つ何か新しい生活を生み出していこうという烈しい共通の願いがあって、このことだけが私たち二人を結ぶ共通点であったのです。
>
> Only the fierce common desire to create a new kind of life, this was all that could make us truly meet. (vii)

少なくとも二人にとって、こうした激しい生き方は、先に引用したフリーダの言葉を借りるならば、「それぞれの階級をこえて二人の個人としての人間の本質に生れ直す」ための必要にして必然的な愛の形だったのである。

5

「私はいつだってロレンスの天才は私に捧げられているものと思っていた」(I had always regarded Lawrence's genius as given to me)(136)。これはフリーダの言葉である。彼女はロレンスのことを天才であると認めていた。そして天才を相手にしていることに女としての喜びと自負の念を持っていた。しかし、一般的に天才というものが必ずしも、普通の意味での良き伴侶になれるとは限らない。しばしば逆のことが多い。個性の強い天才は自己中心的で、扱いにくい面が多々あるからである。苦しみを味わうことが多いことも確かだ。しかしながら、天才との生活によってしか体験

できない稀有な経験もあるのである。フリーダにとってロレンスとはそのような存在であった。

フリーダはまず何よりもロレンスのことを素晴らしい人間として敬意を払っている。その素晴らしさに圧倒され、炎にでも焼き尽くされてしまったかのように、彼女の意識はすべて叩きのめされたという。そして、時には、畏敬の念に満たされたこともあったと述べている。また時には、陽光の燦燦と降り注ぐ春の一日のように暖かく慈悲深い姿を見せることもあったようだ。しかし、春の日は永遠に続くわけではなかった。俄かにかき曇り、冷たい氷雨となって降り続けることもあったからである。そんな時、フリーダは心の底から暖かな日差しが差し込むのをじっと待ち望んだという。しかし、氷雨ならばまだましであった。時には、ロレンスが悪魔に感じられたこともあったらしく、そんな時、彼女は憎しみを込めて激しく彼を押しのけたと記している。このように、天使かと思えば、一転して悪魔へと変貌するロレンスの姿を目の当たりに経験したフリーダは、「私は天才というものが人間の感情のピンからキリまでの全段階をもちあわせていることを知った」(I learned that a genius contains the whole gamut of human emotions, from highest to lowest. (viii) と告白している。ロレンスは短気で激情型の人物だったので、包み隠すというところがなかった。良くも悪くも率直に感情を露呈したようである。まして相手が気が置けない妻であれば、感情の出方もかなりストレートであったと思われる。そして、天才であるがゆえに、良きにつけ悪しきにつけ、感情の振幅が常識を超えて異常に深く激しかったのだろう。いずれにしても、ロレンスという天才と生活することは喜びの点でも、苦しみの点でも格別であったようである。

フリーダがロレンスを畏敬する点は彼が未知の世界の開拓者であったことである。ロレンスが黙々と小説を書き上げている時、彼女は何か新しい変化がこの世に起こりつつあるという期待に胸を膨らませて心臓の高まりさえ覚えている。彼の文学がこれまで例のない未知の領域を開拓する文学であることを彼女はだれよりもよく理解していたのである。彼女は、未知の世界を開拓するために闘っている、そうしたロレンスを心から愛したようである。一方、ロレンスも、書いた小説をフリーダに読ませ、熱心に批評と感想を聞いたという。彼女自身もロレンスの書くものには深い関心を持っていたが、彼女の励ましと承認さえあれば、誰が酷評しようと、

ロレンスは一向に構わなかったと手記は伝えている。フリーダはロレンスの小説に直接関与はしていない。しかし、二人の例を見ない生活から生まれた小説であるという点では、ロレンスの作品は、フリーダの書いた手記『私ではなく、風』がそうであるように、フリーダとの合作ともいえるであろう。ロレンスはフリーダから計り知れない力をあたえられていたのだ。ロレンスが女性に求めたものは、そのような力であった。見返りを期待した愛情の安売りや、愛情ごっこは嫌悪の的だった。

しかし、ロレンスはフリーダにとって新しい思想を求めて日々闘う開拓者であるばかりではなかった。「彼と旅することは一刻ごとに新しい経験をまざまざと生きることでした」(Travelling with him was living new experience vividly every minute)(115)とフリーダは記している。ロレンスはフリーダを未知の世界へ導く水先案内人でもあり指導者でもあったのである。ロレンスが鋭い直感の持ち主であったことは『鳥、獣、そして花』という詩をみれば一目瞭然である。フリーダの手記でも、ロレンスが青いリンドウの花と不思議な霊交をする場面が記されている。彼は何気ない事物を鋭い直感のメスで切り開き、思いよらない側面を垣間見せてくれる天才であった。ロレンスの友人であったオルダス・ハクスリイも彼の非凡な直感能力を認めている。彼と一緒にいると意識の辺境に連れて行かれる思いがすると述べている。また、彼は病弱であったが、実に生き生きとした現実感覚を持って生きていたようである。卓越した感覚の持ち主であるロレンスはフリーダに様々な未知の体験をさせたのであろう。ロレンスといれば、身の回りのものすべてが新しい光に輝いて見えたのである。旅となれば、また一段と新鮮な経験が待っていたと思われる。フリーダはロレンスと一緒にいてそのような未知の新しい経験をさせてもらうことが大好きだったようだ。おそらくフリーダは、ロレンスと生活する時、冒険好きだった幼いころの胸ときめくフリーダにタイムスリップしたことだろう。

しかし、フリーダの手記はロレンスの別の側面も取り上げている。
それは、よく問題となるロレンスのマザー・コンプレックスである。ロレンスの母は1910年12月、癌のため亡くなっている。享年58歳であった。したがって、ロレンスがフリーダと出会った1912年は、彼にはもはや母はいなかった。ロレンスが母の強い影響力のため通常の恋愛ができなかったという事実は良く知られている。そしてまた、彼が有名な『息子と恋人』

という小説を書くことでマザー・コンプレックスを克服したということも周知の事実である。ロレンスはフリーダに「母が生きていたら、ぼくはお前を愛することができなかっただろう。母が離してくれなかっただろう。」("If my mother had lived I could never have loved you, she wouldn't have let me go.") (56)と語ったという。ロレンスは、この時期、マザコンを克服しつつあったことは確かだ。しかし、フリーダと出会った時もまだその残滓が存在していたように思われる。たとえば『私ではなくて、風が』の中に収録された彼の詩はそれを如実に物語っている。書かれたのは二人がイザール河近郊で暮らしていた時である。タイトルは「愛された男の歌」となっている。この詩は、「この両の乳房が我が家だ、両方の乳房の間が。」(Between her breasts is my home, between her breasts.) で始まり、最後は、「僕は永遠の時を／顔をうつむけに乳房の間に埋めて過ごしたい／静かな心臓は安心に満たされ／静かな手は両の乳房に満たされて。」(And I hope to spend eternity／With my face down-buried between her breasts／And my still heart full of security／And my still hands full of her breasts.)(45)という言葉で終わっている。「愛された男とは」もちろんロレンス自身を指し、「両の乳房」はおそらくフリーダのものであろう。したがって、この詩はフリーダに愛されたロレンスの幸福感を詠ったものとみなしてよい。問題は女性の「両の乳房」が安住の地としている点にある。そのため、この詩は、母の胸に安らぐ赤ん坊を連想させるところがある。なるほどロレンスはすでに母を亡くしているが、今度はフリーダという新しい母を得たのではという連想を起こさせる詩である。それとも、男は女から生まれるものゆえ、女に対して母への郷愁を拭い去れないのであろうか。しかし少なくとも、上の詩はロレンスのマザー・コンプレックス的体質を思わせずにはおかないことは確かである。実際、フリーダはロレンスより7歳年上であったし、性格的にも母性的な女性であった。そう考えると、フリーダはロレンスにとって十分母親的存在になりえる女性だった。フリーダは、「男は二度生まれると思う。一度は母に生んでもらった時、次は愛する女によって生まれ変わらねばならないのです。」(I think a man is born twice: first his mother bears him, then he has to be reborn from the woman he loves.)(56)と述べているが、これはロレンスにそのまま当てはまるであろう。確かにロレンスはフリーダと出会うことでマザコンを克服し生まれ変わったといえるであろう。しかし、それは第一の母を

卒業したに過ぎず、完全な精神的独立とはいえないようである。やはり、ロレンスにとってフリーダとは第二の母的な側面があることを否定することはできない。もちろん、フリーダに対する感情は実母に対する感情とは多少異質なものであることはまちがいないことであるが。

ロレンスには、こうしたマザコン的体質と密接な関係にある幼児性の存在も認められる。それは、フリーダの子供たちに対するロレンスの激しい嫌悪感である。フリーダには前夫アーネストとの間に三人の子供がいたことはすでに述べた。最初は子供と会うことはアーネストに禁じられていたが、親子の絆は深かった。子供たちは成長するにつれてフリーダを訪ねてくることがあった。そんな時、ロレンスは嫉妬心のためか、子供たちにいい顔をしなかった。不機嫌になったり、時には嫌悪感を露わにした。ロレンス自身、親子の情は絶ちがたいことは、身をもって一番よく知っていた筈である。にもかかわらず、彼は、フリーダの子供たちに嫉妬したのである。フリーダは子供とロレンスの間で相当苦慮したようだ。上に見たように、フリーダはロレンスにとって母親的存在であり、世間と闘う戦友であり、よき批評者であり、よき理解者であると同時に絶対的な精神の拠り所であった。したがって、ロレンスにしてみれば、フリーダは子供たちの介在さえ許すことができない絶対的かつ運命的な存在であったのであろう。この点をフリーダもよくわかっていたようである。残してきた子供たちに強く後ろ髪を引かれながらも「ロレンスは子供たち以上に私を必要としていた」(he needed me more than they did) (60)と述べている。

フリーダの手記を中心にして論じてきたため、フリーダの側から見たロレンス像となったが、少なくとも、フリーダがロレンスをどのように捉え、どのような関係を築き上げてきたかは多少明らかにすることができたと思う。驚くことは、フリーダの大地のような女性としての強さである。次の言葉はフリーダの女性としての大地のごとき不動の強さを表している。本物の女性性に目覚め、それに徹して生きた者の凄まじい本音が伝わってくる言葉である。

> 彼は心の奥底では女というものを恐れていたのだと私は思います。結局、女はそれほど絶対で、否むことのできないものなのです。男は動き回り、その精神はあなたこなたへと飛んで行くのですが、女というものを超えて行くことはならないのです。女から男は生まれ、そし

て女へと、心身の究極的必要から、帰っていくのです。女とはすべてのものの帰っていく大地であり、死のようなものなのです。

In his heart of hearts I think he always dreaded women, felt that they were in the end more powerful than men. Woman is so absolute and undeniable. Man moves, his spirit flies here and there, but you can't go beyond a woman. From her man is born and to her he returns for his ultimate need of body and soul. She is like earth and death to which all returns. (57)

ロレンスは、天使と幼児と悪魔の感情の谷間を揺れ動く存在であった。フリーダは、こうしたロレンスを受け止め、「人間として立派に太刀打ちできた」3のである。フリーダの女性としての恐るべき受容能力と柔軟な適応性、そしてそれに加えて、巨大なエネルギーと磁性を秘めたブラックホール的生命性は特筆に値いするであろう。

註

1. Frieda Lawrence, *Not I, But the Wind*, (1934; New York: Viking Press; Carbondale: Southern Illinois University Press, 1974) vi.
以後、本書からの引用は引用文の後の括弧の中にページ数のみ示す。翻訳に当たっては、必要に応じて二宮尊道氏の訳書『私ではなくて風が』（彌生選書　昭和 52 年）を利用させていただいた。

2. D. H. Lawrence, *Apocalypse* (1931; Harmondsworth: Penguin, 1980) 15.

3. フリーダ・ロレンス.『私ではなくて風が』二宮尊道訳（彌生選書 昭和 52 年）246.

参考文献

Chambers, Jessy. *D. H. Lawrence: A Personal Record.* 1935. Cambridge: Cambridge University Press, 1980.

Huxley, Aldous, ed. *The Letters of D. H. Lawrence.* London: Heinemann,1932.

Lawrence, D. H. *Women in Love.* London: Heinemann,1921; 1971

Spilka, Mark. *The Love Ethics of D. H. Lawrence.* Bloomington: Indiana University Press, 1955.

川邊武芳『失われた故郷』英宝社 2001 年。

中橋一夫『ロレンス』研究社 昭和 55 年。

吉村治郎『ロレンスの文学と思想』開文社出版 2006 年。